江戸時代の渡し舟再現

紀北の銚子川で進水式

江戸時代に紀北町の銚子川を渡る際、旅人たちが利用していた渡し舟が再現され、26日、同川で進水式が行われた。舟を作った非営利組織（ＮＰＯ）法人「ふるさと企画舎」は、川面に浮かぶ舟を前に「当時の旅の姿が再現された」と感慨を深めている。

江戸時代に熊野古道を旅する様子が書かれた道中日記に、「水が多い時期に銚子川を渡る際は、渡し舟を利用する」との趣旨の記載があるのを知った同ＮＰＯの田上至理事長(45)が中心となり、３年前から渡し舟を再現しようと取り組んできた。

しかし、舟の形状などは記録になく、田上さんらは地域のお年寄りに大正時代ごろまで使われていた川舟について聞き取ったり、県内に残っている川舟を参考にしたりし、紀宝町の船大工谷上嘉一さん(65)に建造を依頼した。完成した渡し舟は長さ4.5㍍、幅1.4㍍。当時と同じスギの木で作り、近くの熊野古道馬越峠にちなんで「馬越」と名付けた。

進水式には約50人が集まり、田上さんと谷上さんが櫓を手にこぎ出した。試乗した子どもたちも、安定して進む渡し舟に喜んでいた。同ＮＰＯは今後、定期的に渡し舟を使ったイベントを行う予定で、「ぜひたくさんの人に、江戸時代の旅の雰囲気を味わってほしい」と話している。

進水式で銚子川にこぎ出した渡し舟